

## 卒業論文の要旨

論文題目	自然に対する認識と課題～今日の日本の農業の現状から見て～
氏名	高橋 宏輔
メジャー	環境学
<p>(要旨)</p> <p>地球温暖化が今後も悪化していくという予測があるなかで、地球温暖化に影響されやすい農業分野が、結果的に地球温暖化を促進させる働きをしているという課題を克服させるため、主に二種類の農業の生産方法を対象として自然環境に影響を与えず、安心安全に農作物を育てる事ができるかについて提言を行ったものである。</p> <p>本研究はまず、自然という言葉の理解、日本人の自然観について整理した。次に、自然破壊を行っている現状について、主に社会経済活動が起因しているという考察をたてて分析・検討した。</p> <p>次に、現代農業と自然農業の二つの農業を対象として調査を行った。現代は機械や農薬を用いた現代農業が主な生産方法となっている。過去には、福岡正信氏や岡田茂吉氏が提唱した自然農業という農法があった。特に福岡氏はやらなくていいことを探していく中で現代農業を否定し、不耕起、不肥料、無農薬、無除草の四大原則を掲げ、自然農法を確立していった。農法あるいは、農を軸にした生き方の哲学を示す概念にもなっている。</p> <p>二種類の農業が、現代において普及させるには様々な問題が挙げられる。現代農業においては、エネルギー依存の問題や地球温暖化の促進など次世代への問題にわたる。自然農業では、収穫量が現代農業よりも低下するため、現在の市場流通では発展しない問題点がある。</p> <p>次に、スマート農業と環境保全型農業の二つの農業を行っている事例について調査を行った。海外では、アフリカやオランダを中心にスマート農業を成功させている。アフリカでは農業の科学技術が発展しており、ロボットやコンピューターを導入することで、収穫量の最適化を果たしている。オランダでは、湿度や温度を管理できるビニールハウスを導入し、徹底的な環境保持を行った。</p> <p>また、日本では環境保全型農業の取り組みが始められた。特に石川県では消費者の安全志向の高まりが強いことから環境と調和した持続的な農業生産方式を導入した。具体的には、土作り、前作のすき込み、たい肥の施用等を導入することによって、化学肥料の使用量を低減している。</p> <p>今回の調査の結果から、現代農業は土地の自然力の低下や石油に依存した農業の進行によって、エネルギー生産の低下という次世代にまで影響を及ぼす問題が明らかになった。一方、自然環境に影響を与えない生産方法として、農薬や肥料、機械を使用しない自然農業が最適な農業方法であり、自然農業を今後普及していくことで、現代から次世代において最適である農業と結論づけた。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>本論文は、日本における「自然」及び「自然観」に対する基本的考察に基づき、「現代農業」や「自然農業」に固有する特徴によって生活環境にもたらす影響を分析検討し、「自然農業」が農法と持続性から見て最適性を有すると論じたものである。なお、海外事例も取り入れて分析検討している。また、論理の特徴として農法や経済性に止まらず、自然環境の保護に基づいた持続可能性を論じている。ところで、「自然農業」の事例に対する分析が足りないところがあるけれど、論文の全体から見てテーマの選定と文献の調査整理及び論理の構成を考えて、ここに推薦する。</p>	